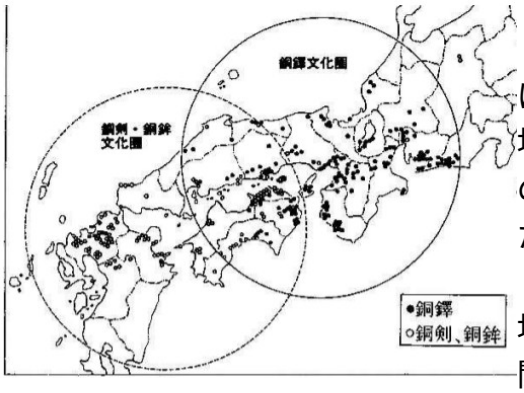
出雲からやって来た神々

2022.1.7　藤代歴史愛好会　石山　博

日本古代の王朝（王権）と言うと近畿大和王朝をイメージする方が多いと思いますが。実は、はじめに出雲王朝（銅鐸文明圏）があって、次に九州王朝（銅矛文明圏）、そして近畿王朝（現代まで続いております。）になっていったと考えられます。



銅鐸について言えば、出雲が侵略（国譲り）を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが、近畿地方であると考えられます。図の銅鐸文化圏というのは、出雲の銅鐸文化圏が敗れたあとの勢力図だったと考えられます。

この国譲りで、出雲が支配された事により、近畿地方へ、次の段階で、更に２つの集団が東方（信州、関東）へ脱出したと考えられます。

１つは、タケミナカタ神に象徴される諏訪族で、各地に道祖神を分布させながら諏訪神社を建てていきます。今一つは、武蔵に足立郡をたてたアラ・アヤ族で、関東各地に氷川神社を創建し、やがて朝鮮半島からの渡来人「今来のカラ人」と共存しながら関東地方に広く展開していきます。

氷川神社の社伝によれば、孝昭天皇 3 年 4 月の創建という。「国造本紀」によると、初代无邪志国造（むざしのくにのみやつこ）の兄多毛比命（えたもひのみこと）は成務天皇（第 13 代天皇）の時代に出雲族をひきつれてこの地に移住し、祖神を祀って氏神として、当社を奉崇したという。この一帯は出雲族が開拓した地であり、武蔵国造（无邪志国造）は出雲国造と同族とされ、社名の「氷川」も出雲の簸川（ひかわ）に由来するという説があります。

解説：国造本紀【こくぞうほんぎ】は、『先代旧事本紀(せんだいくじほんぎ)』の巻第 10 にあたる一巻の書。『旧事本紀』は聖徳太子の撰(せん)という序文を有するが、平安初期につくられた偽書とされる。しかし、そのなかの巻第 3「天神本紀」の一部、巻第 5 の「天孫本紀」、それにこの「国造本紀」は、他のいずれの文献にもみえない独自の所伝を載せていて注目される。「国造本紀」は、大倭国造(やまとくにのみやつこ)以下全国で 130 余りの国造を列挙し、それぞれに国造任命時代、初代国造名を簡単に記したものである。それらのなかには和泉(いずみ)、摂津、丹後(たんご)、美作(みまさか)など後世の国司を記載したところもあり、また无邪志(むさし)と胸刺(むさし)、加我(かが)と加宜(かが)など紛らわしいものもあるが、概してかなり信用できる古伝によっていると思われ、古代史研究の貴重な史料となる。出典：日本大百科全書(ニッポニカ)「国造本紀」

一方、氷川神社の摂社に「門客人（カドマロウド）神社」がある（現在も氷川神社社殿の東隣に鎮座）。元々は「荒脛巾（あらはばき）神社」と呼ばれていたもので、アラハバ

キが「客人神」として祀られている。このアラハバキ社は氷川神社の地主神である。現在祀られている出雲系の神は、武蔵国造一族とともにこの地に乗り込んできたもので、先住の神がアラハバキとみられる。

ちなみに、門客人は、カドマロウドと読むそうです。
”火の神事”＝大湯祭は、どうやら門客人神社の祀りごと、の言い伝えのようです。門客人神社のことを調べて見ると、前述のように、出雲族がこの地にやってくる前の地元神だといいます。地元の民が先にいて、あとから出雲族がやってくる訳だから、なにか逆のような気がする。門客人神社のことを、荒脛巾（アラハバキ）神社とも言うらしい。”マロウド”とか”アラハバキ”とか、言葉が日本語とも思えなくなる。

　このほか、景行天皇の皇子・日本武尊が東征の際に負傷し、夢枕に現れた老人の教えに従って当社へ詣でたところ、立てるようになったという伝説が残されている。このことから本地域を「足立」と称するようになったとされます。

解説：摂社【せっしゃ】神社の格式の一つ。本社に付属し、その祭神と縁故の深い神をまつった神社。本社と末社との間に位し、本社の境内にあるものを境内摂社、境外にあるものを境外摂社という。出典：精選版 日本国語大辞典「摂社」

解説：あらはばき神社は、記紀神話や伝統的な民話などに登場しない謎の神で諸説あるが、「荒覇吐」「荒吐」「荒脛巾」「阿良波々岐」などと表示され、現代でも全国各地の神社でひっそり祀られている。但し、客人神（門客神）となっている例が多い。これは、「元々は主神だったのが、客人（まれびと、まろうど）の神に主客転倒したもの」といわれる（地主神）。神社では、脛（はぎ）に佩く「脛巾（はばき）」の神、また「足の神」とされてきた。（多賀城市の荒脛巾神社の祭神「おきゃくさん」は、旅人らから脚絆等を奉げられてきたが、下半身全般をも癒すとされ、男根像も奉げられる。（金精神）
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』

　祭神がどの神であるかは、以下のように多くの議論がなされてきました。
　平安時代中期の『延喜式神名帳』では一座として記載されています。

- 日本武尊の東征時、須佐之男命を勧請したとする説（吉田兼永）。
- 須佐之男命とする説（『大日本神祇史』）。
- 男体社：須佐之男命（相殿に伊弉諾、日本武尊、大己貴）、女体社：奇稲田姫命（相殿に天照太神宮、伊弉冉、三穂津姫、弟橘媛）、簸王子社：大己貴とする説（『風土記稿』）。
- 男体社：伊弉諾、女体社：伊弉冉、簸王子社：軻遇突智とする説（『大宮氷川太明神縁起之書』）。〕

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』

神話では、大国主の子タケミナカタ（建御名方神）は高天原からやってきたタケミカヅチ（建御雷神）に術で破れた後、諏訪まで逃げ延びたとされ、諏訪大社の祭神となった。（諏訪大社の起源については、タケミナカタ神話のほかにもう一つ甲賀三郎伝説がある）

解説：甲賀三郎（こうがさぶろう）は、長野県諏訪地方の伝説の主人公の名前。地底の国に迷いこみ彷徨い、後に地上に戻るも蛇体（または龍）となり諏訪の神になったなど、さまざまな伝説が残されている。近江を舞台にした伝説もある。

鎌倉時代には諏訪上社の大祝を務めた諏訪氏（神氏）が武士化して北条得宗家の御内人となり、諏訪大社が鎌倉幕府の庇護を受けるにつれて諏訪信仰が全国に広まり、軍神として多くの武士から信仰を集めた。諏訪氏の始祖が8歳の時に諏訪明神（建御名方神）に自分の生ける神体として選ばれたという伝承から、大祝代々は現人神、すなわち諏訪明神の後裔で明神そのものとして崇敬された。諏訪氏がこれを利用して権力を振るい、諏訪神党と称される武士団を形成していく。

しかし、幕府滅亡後に起こった中先代の乱で諏訪氏の権威は失墜し、カリスマ性を失った大祝から氏人は離れた。この時代には大祝家直伝の縁起譚ではなくもっと在地の風景に根付いた縁起が求められた影響で、各地に諏訪氏や大祝とは絡みのない新たな「諏訪縁起」が同時多発的に発生した。諏訪の神を武士として描く甲賀三郎伝説はその中の一つである。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』

一方で、諏訪地域に伝わる神話ではタケミナカタ（建御名方神：諏訪明神）が諏訪に侵入した征服者として描かれている。これによると先住神の洩矢神（守矢氏の遠祖）が建御名方神と対抗しようとして戦いを挑むも敗れ、最終的に諏訪の統治権を建御名方神に譲ったと言われている。

タケミナカタの逃走ルートはほぼ解明されていて。出雲の美保から逃れ、能登半島の入口石川県羽咋市（はくいし）の南隣、志雄町付近に逃げ、さらに船で日本海を北上し、越後から信濃川沿いに内陸に入り、長岡－長野－上田－武石峠－松本－塩尻を経て諏訪に入った。途中の上田市の生島足島神社（いくしまたるしまじんじゃ）では、「神代の昔、タケミナカタ神が信濃川を遡り、諏訪へ逃げようとして、この地に滞在した時、地元の人々が米粥を煮て献上した」という故事を、御籠祭として継承している。

大国主の国造りの頃の話として、辰野町の矢彦神社には、子のコトシロヌシ（事代主神）とタケミナカタ（建御名方神）を従え、当地に立ち寄ったとの言い伝えもある。

『諏訪明神絵詞』によれば、「古い時代に外部からタケミナカタの神が侵入してきた時、それを天竜川河口で迎え撃ったのがモレヤの神であったが、戦いに敗れた」と記されている。つまり、タケミナカタは外来の神で、先住民の神はモレヤの神とミサクチの神であった。戦に勝利したタケミナカタは諏訪大明神となり、負けたモレヤの子孫の守矢氏は神社の筆頭神官となった。また守矢家は物部守屋と関係があるという説や家紋の「丸に十字」の島津家と同じ紋章は、「羊を象徴する古代シュメールの楔形文字」とする説もある。

解説：『諏方大明神画詞』（すわだいみょうじんえことば）は、長野県の諏訪地域に鎮座する諏訪大社の縁起。1356 年（正平 11 年 / 延文 1 年）成立。全 12 巻。著者は諏訪円忠（小坂円忠）。

文明４年（1472）に、伊那出身の僧宗詢（そうじゅん）が高野山悉地院（しっちいん）で、先師盛円法師の所持されるものを借り、安居の間に筆写したもので、諏訪では上社権祝家に伝えられて「権祝本」とよばれ、のち神長官家にうつって、いまその家に所蔵され、県宝の指定を受けている。美濃紙六十一枚に筆書した詞章である。
「右の写真：権祝本」　出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』

冒頭でも述べましたが、古代日本列島において文明の衝突・興亡の痕跡が随所に見られます。著名な例では、弥生時代の銅矛文明圏と銅鐸文明圏の衝突、そして銅鐸文明の消滅という考古学的事実があります。この二大青銅器文明圏の衝突と興亡という列島内大事件が神話として残っています。

一つは、『古事記』にある大国主の国譲り神話です。天国（あまくに）の神々が出雲の主神である大国主に国を譲れと武力介入した神話です。出雲には荒神谷遺跡などから銅鐸を含む大量の青銅器が出土していますが、この神話は銅矛文明圏（天国、壱岐対馬）による銅鐸文明圏の出雲への侵略が「国譲り」という表現で語られているのです。

この侵略に最後まで抵抗した神が建御名方神（たけみなかた）です。彼は戦いに敗れ信州の諏訪湖まで逃げます。そして、その地から出ないことを条件に許されます。

天国（あまくに）の軍隊は、銅鐸文明圏の中枢領域である近畿にも突入を繰り返します。近畿から破壊された銅鐸が出土していますが、これもこの侵略の痕跡でしょう。天国の軍隊は神聖なる祭器である銅鐸を破壊し、銅鐸文明の神々（人々）は東へ東へと逃亡したと考えられます。

その様子を「伊勢国風土記」では次のように記されています。天日別命（あまのひわけのみこと）が率いる天国の軍隊が伊勢の国を侵略し、伊勢の王である伊勢津彦は東へと逃げ、彼もまた信濃の国へ住んだと。
『注：伊勢国風土記逸文で、伊勢津彦は、本名を出雲建子命（いずもたけこのみこと）、またの名を伊勢津彦神、櫛玉命（くしたまのみこと）、『播磨国風土記』では伊勢都比古命と表記される。』

建御名方神や伊勢津彦はなぜ信州に逃げたのでしょうか。そして、なぜ天国の軍隊は信州に逃げた彼らを捕らえなかったのでしょうか。ここに、信州が持つ不思議な歴史の謎があります。

他方、これと共通する風習が中世ドイツにもありました。追われた犯罪者が四本の柱で囲まれた場所に逃げ込めば、役人も手出しができなかったと言われています（阿部謹也『中世の星の下で』ちくま文庫）。

四本の柱の中は神聖な地、歴史学でアジールと呼ばれる空間なのでした。

これは諏訪大社の御柱とそっくりです。 古代信州は軍隊と言えども侵すことのできない神聖な地、アジールだったのです。だから、追われた銅鐸文明の神々は信州へと逃げた、そう考えられます。

そして、この考えが正しければ、諏訪大社の御柱祭は弥生時代以前にまで遡ることになります。古代日本での文明の衝突を考えるとき、信州のもつこの神聖性はキーポイントとなるのではないでょうか。

解説：アジールあるいはアサイラム（独: Asyl、仏: asile、英: asylum）は、歴史的・社会的な概念で、「聖域」「自由領域」「避難所」「無縁所」などとも呼ばれる特殊なエリアのことを意味する。 ギリシア語の「ἄσυλον（侵すことのできない、神聖な場所の意）」を語源とする。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』

もう一つの神ミサクチ神は、「巨木・巨石・光った岩など樹木の上に降りてくるナイーブな神」とされます。

ミシヤグチ神（ミサクチ神）は、自然万物に降りてくる精霊と言われます。

ミシヤグチ神は洩矢神の後裔の神長官（守矢家）邸の一画に祭られています。守矢家で現在 78 代目となっています。一子口伝の秘事として伝えられてきていましたが、２～３代前（明治維新により）に多くが失われたようです。

「守矢神長家の話（守矢早苗）より」　諏訪大社の祭政体はミシャグチ神という樹や笹や石や生神・大祝に降りてくる精霊を中心に営まれます。家ではミシャグチ様と呼んでいましたし、多くの呼び名や宛字のある神様ですが、ここではミシャグチ神とします。

そして、一年に七十五度の神事が、中世までは前宮と大祝の住む神殿、そして冬季に掘られた竪穴である御室や十間廊、八ヶ岳山麓の御射山（現・諏訪郡富士見町）で行われました。そのミシャグチ神の祭祀権を持っていましたのが神長であり、重要な役割としてのミシャグチ上げや、ミシャグチ降ろしの技法を駆使して祭祀をとりしきっていました。

左の写真：市史跡の「神長官守矢邸跡」

ミシャグジ、ミシャグジ様、ミシャグチ、ミサグチと呼ばれます。またそれを祀っていた諏訪の氏族、守矢（洩矢）氏の姓から、モレヤの神、モレヤ様などとも呼ばれます。漢字では、御社宮司や御射宮司等と書かれます。

諏訪湖の土着神で、縄文時代から祀られてきたともされています。現在でも諏訪大社（特に上社）に祀られ、蛇神、また御射山をご神体とする山神で、ミシャグジ降ろしの祭祀において憑依託宣（ひょういたくせん）する神です。

この地方の伝承によれば、元々は何柱かの土着神がいたようで、それが次第にミシャグジに集合されていったと考えられています。現在は神格として、蛇神（山神）兼、狩猟神となっています。古くはモレヤ神が木石の神、チカト神が狩猟の神、ソソウ神が蛇神などとして、別々の神格として祀られていたようです。

ミシャグチ神をアラハバキ神の仮の姿とする見解があるが、縄文時代に遡る神ではあろうが、まさか一神教の時代でもあるまいし、積極的にアラハバキ神とする根拠は乏しいのではないか。どちらかと云えば「石神」ではあるまいかとする『神社を中心とした宝飯郡史』の説は興味深い。出典：守矢早苗　（「神長官守矢資料館のしおり」より）

ミシャグチとソソウ神（『竪穴斎屋の原始性霊』より）

湖の方角から、神域の北限、有賀のこしき原附近、そして真志野、それに、神原の入口の道俣(みちまた)に　所末戸(ところまつ)社(土地をまつるという意味)に出場する水平に訪れて来る神であり、地主神の性格をもっているようだ。この神は、「そそう神まわり給たれは、うれしみよろこひてつかへまつりぬ」と申立にあるように狂喜してむかえる神で、動物犠牲を要求する神である。

そして、御室内の小蛇や大蛇三体に向ってこの申立をするところをみると、ソソウ神は蛇体であると考えるられる。御左口神は上空より垂直降下し、ソソウ神は諏訪湖の方より水平的に訪れ、御左口神は巣をなす恐怖すべき男性的精霊であり、ソソウ神は狂喜して迎える女性的精霊である。それは蛇体をもって現わされる。

全く性格を異にする精霊が御室の内部、萩組の座において婚姻する。

出典：「諏訪信仰の発生と展開」　古部族研究会

御頭祭（おんとうさい）について

諏訪神社には古代ユダヤの伝承と関わるとされる御頭祭（おんとうさいー「アブラハムが我が子イサクを神のお告げにより殺そうとする」のとそっくりな神事）があるが、ミサクチも「ミ＋イサク＋チ」で、チは大蛇または精霊であり、イサクとつながる神ではないかと言う説があります。

諏訪大社は平安時代には南方刀美（みなかたとみ）神社と呼ばれていた。（延喜式神名帳）そうなると、「建御名方(タケミナカタ)」は南方の武人ということになり、トミは蛇を表す語で蛇神族は金属精錬とも深いかかわりを持つ。

諏訪大社には種々の祭事が伝わる。「御室神事」という縄文色の濃い祭事は、ミサクチ神と思われるご神体と“そそう神”という蛇神が１２月末から３月まで竪穴の中で一緒に過ごす祭という。

「湛え神事」は、神の使いオコウが行く先々の「湛え」の場所で鉾の先に鉄鐸をつけて振り鳴らす。　また、藤森栄一著「銅鐸」学生社刊(s39.8.5 初版)によれば、いま国内の古社で鉄鐸を蔵するもの、諏訪神社上社、小野神社、上伊那郡小野村矢彦神社である。諏訪神社には、現在六口ずつ三組あり、形状・大きさは大同小異である。（右図）社伝によると往古神使の巡回に使用した宝鐸で、室町時代には、これを打ちならして誓約の証とした記録がある。古来の神宝中でも、特別な位置を占めた重宝である。

諏訪大社上社所蔵、諏訪市教育委員会写真提供

これは従来豊穣を祈る農耕儀礼と考えられていたが、近年の研究で「湛えの場所にミサクチ神をおろして鉄製品の原料であるスズ(火山帯の沼沢・湿原の水は鉄分を含んでおり葦や萱などの草の根元にはバクテリアの働きで自然に褐鉄鉱の塊が生じるという)の生成を祈念する行事」と解釈されるようになった。諏訪上社では、現在でも「鞴護（ふりい）祭」が行われるなど、鉄と諏訪神社の関わりはまことに深いと言えます。

美濃の垂井町に南宮大社がある。祭神は金山彦で、イザナミが火の神カグツチを生んで死んだ時の嘔吐物から生まれた。これは灼熱によって溶ける金属を嘔吐に見たてたもので、製鉄の様子を象徴している。当社は、鉱山・金属精錬関係者の篤い信仰を受けるが、もとは諏訪大社の中宮で、稚宮は三重県上野市の敢国（あえのくに）神社であり、ここにも金山彦が祭られている。諏訪大社はもともと製鉄の神であり、出雲は砂鉄から鋼塊を造るタタラ製鉄の先進地であった。

出雲の姓は関東の地名へ

出雲古代史に詳しい朴（パクビョンシク）氏は、東部出雲の人の姓を電話帳で調べ、最も多い姓を次の３群に分けた。

① 新井・荒木などの[アラ]グループ
② 足立・安達などの[アダ] 〃
③ 有田・有馬などの[アリ] 〃

その結果、鹿島町や玉湯町などでは上記３グループの姓が全世帯の７０－９０％もあり、この傾向は東部出雲で顕著であった。
この３つの姓は、朝鮮半島の安羅伽耶(アラカヤ)から来た証拠という。

すなわち①と③は安羅そのもので、②は「安羅＋ダル（地・国の意味）」で「アラダル」が縮小したものと説明する。出雲弁の「少し」を「チョンボシ」というのは朝鮮の慶尚方言の「チョム」が訛ったものだそうである。

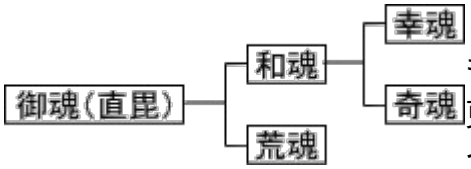
これら３グループの名前はそのまま関東にきわめて頻繁に現れてくる。とりわけ埼玉県秩父地方から東京北部を通り東京湾へ注ぐ荒川流域(支流域も含めて)に多い。郵便番号簿でアライ・アラキ・アダチの３つの名を今に残る地名で拾ってみると、次のようである。

埼玉県では、
郡名： 北足立郡
村名： 荒川村
字名： 川口市新井宿・荒川町・新井町、川越市新宿（あらじゅく）、行田市荒木、深谷市新井、本庄市　新井、花園町荒川、栗橋町新井、大利根町新井新田、川里村新井　とあった。

ほかに所沢市荒幡、吉見町荒子の名にアラがつくことが気にかかる。東京都では、区名で足立区・荒川区があり、日野市新井の地名もある。

こうしてみると埼玉県にかなり集中していることが分かる。このことは県名からもうかがえる。埼玉は“さきたま”で、この名はサキを前とか先にあて、辺境を意味するという解釈もありますが、神の御心である“幸魂（さきたま）”とも考えられます。
これは大物主神が大己貴命（おおなむちのみこと）に“我は汝の幸魂奇魂（さきたまくしみたま）である”と答えた、というその幸魂であります。

解説：和魂（にぎみたま）-幸魂（さきみたま）奇魂（くしみたま）-



古代において神様の御魂（みたま）（直毘【なおび】とも）は和魂（にぎみたま）と荒魂（あらみたま）にわかれ、更に和魂は幸魂（さきみたま）と奇魂（くしみたま）の二つの働きにわかれると考えられました。
出雲大社で売っている小さな鈴には、“しあわせの鈴”と名付けられ、箱裏の説明には「大国主が国造りの大業を成し遂げたのは命の奥に潜む“幸魂奇魂（さきたまくしみたま）”の霊力であった。朝夕鈴の音色にあわせ“幸魂奇魂（さきたまくしみたま）守り給え、幸（さき）はえたまえと一心に念じれば明るい毎日を過ごすことができる」（要約）といったことが書かれていた。まさに、出雲人の関東への移住は、県名にまで及んでいたのです。
明治天皇が東京へ遷幸（せんこう：新しい都へ天皇が移ること。）されたのち、最初に詣でたのは埼玉県大宮市にある氷川神社であった。氷川の名は、斐伊川からとったといわれ、当社の祭神は須佐之男命・大己貴命（おおなむちのみこと）・稲田妃命の３神で、いずれも出雲の神々であることは言うまでもありません。

解説：朴 炳植（パク・ビョンシク、1930 年 - 2009 年 12 月）は、韓国の言語研究家。朝鮮の咸鏡北道（現在北朝鮮）に生まれる。高麗大学校経営大学院修了。建設会社を興したのち 1979 年ころニューヨークに渡り、古代言語研究を行い、日朝両語の「音韻変化の法則」を創始し、『日本書紀』の不明とされていたわざうたを解明したと称した。しかし同時期に現れた藤村由加、李寧熙とともに日本の専門家からは徹底批判され、認められていない。（藤村、李の項目参照） 2009 年 12 月、アメリカにて逝去。享年 79 歳。童謡（わざうた）とは、古代日本で流行した歌謡で、種々の社会的事件の前兆として受け取られたもの。謡歌とも。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

さてここからは、常陸と出雲との関係について考えます。
常陸の出雲神話：常陸の「八岐大蛇伝説」

偶然なのかどうかわかりませんが、昔から常陸国の新治郡に「やまたのおろち」伝説があります。笠間市稲田には「奇稲田姫」を奉った「稲田姫神社」が、稲田姫の父母「手名椎（てなつち）足名椎（あしなつち）」の住んでいたと言われている所には「関戸神社」あり、「手名づちさん、足名づちさん」の相性で今も呼ばれています。
笠間市内には「素戔嗚尊」を奉った八坂神社があります。「やまたのおろち伝説」は『古事記』の出雲のものと全く同じ。おろち退治の際、おろちに飲ませた８個のお酒の

入った瓶のうち３つが、おろちが暴れた際飛んできた瓶を奉った「三つ瓶神社」も市内にはあり、実際に瓶が三つ奉ってあります。

　これらの神話は、５世紀頃の朝廷の領地拡張寺に出雲系の氏族が集団で移動してきて、常陸国北西部を開拓したときに持ち込まれたのではないかと言われています。
　その根拠としては、常陸国北西部に点在する（出雲系様式といわれる）前方後方墳がほぼ５世紀初頭のものと推定されているからです。

（前方後方墳一覧）
后塚古墳　【きさきづかこふん】　土浦市
宝塚古墳　【たからづかこふん】　茨城郡茨城町
勅使塚古墳【ちょくしづかこふん】行方市
長堀２号墳【ながぼりにごうふん】石岡市
姫塚古墳　【ひめづかこふん】　東茨城郡大洗町
真崎５号墳【まさきごごうふん】　那珂郡東海村
丸山古墳　【まるやまこふん】　石岡市

＜稲田姫神社縁起＞について
・祭神・・・奇稲田姫之命
・由緒沿革・・ある家の童がちかくの好井（良い井戸・泉）で水を汲もうとしていると、少女が樹木の下に現れた。童は不思議に思ってすぐに家の主人に知らせ見てみると、その少女は容姿端麗の貴人に見受けられた。主人がその少女に名を尋ねると「私は素戔嗚尊の妃奇稲田姫と言います。あなたの祖は私に仕えていた者です。私は今、降りてここにいることになりました。よろしく私の父母の祀と私たち夫妻の宮を営み、好井の水を以て酒飯を作り、私に奉じるように」と言った。主人は驚いて社殿を造り、神霊を鎮斎した。
沙羅に水田を共し、これを稲田田供村と名付けた。

　この縁起からも出雲系氏族がこの伝説を持ち込んだことが推察できます。
では、どうして「出雲系の氏族」が常陸に移住してくることになったのでしょう。
それは、これから語る「国譲り神話」に隠されているような気がします。
二つの国譲り：出雲の祖神による東方開拓
大国主命と事代主命（ことしろぬしのみこと）

　出雲民族の太祖は、天照大神の弟である素戔嗚尊（スサノオノミコト）ですが、神話の中で度々日韓の間を往来し、我が国の文化の上に、また殖産興業の上に欠かすことのできない存在として重要な役割を果たす神となっています。

　出雲系の太神・大国主命は、素戔嗚尊の子孫の第５代に当たるとされ、産みの子宝１８１神を数える艶福(えんぷく)の長者として七福神の第一に「大黒様」として崇められています。

　その大国主命の第４子・事代主命は、摂津の国、西宮の里に祭られて「恵比須様」と称され、一竿を手にしてにこにこと笑顔で、毎日海上に出て超然として物事にこだわらず悠々自適な生活を送っていた様が、父の大国主命と共に人々に福の神として崇められるようになりました。

大国主命と小彦名命（すくなひこなのみこと）
　小彦名命は『古事記』ではカムムスヒ、『日本書紀』ではタカムスヒの手俣からこぼれ落ちた子であり、『日本書紀』には「オオナムチ（オオクニヌシの別名）と小彦名命と、力を合わせ心を一つにして、天下（あめのした）を経営（つく）る。」と書かれています。「スクナヒコナはオオナムチの対称または連称である」と西郷信綱氏は書いています。（『古事記の世界』）

解説：西郷 信綱（さいごう のぶつな、1916年1月3日 – 2008年9月25日）は、日本文学者（上代文学・古代文学）。横浜市立大学名誉教授。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』

解説：『少彦名の命（すくなひこなのみこと）』は、海の向こうの常世の国からガガイモの実の船でやって来た小人神で、御伽草子の一寸法師などのルーツとも言われています。明るくユーモラスでいたずら者、豊かな知識と技術をもち知恵者なので神話の世界では人気者です。 あの出雲の大国主命の国造りに協力して全国を回られました。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』

　このオオナムチとスクナヒコナは、一神として常陸の国に再生していることを伝えているのが、「大洗磯前神社（おおあらいいそさきじんじゃ）」の縁起です。

　『文徳実録』は斉衡三年（８５６）十二月二十九日の条に、「常陸国の知らせによると、鹿島郡大洗磯前に神が新たに降った。海水を煮て塩を作った人が夜半に海を望むと、天の辺りが光り輝いていた。翌朝になってみると、水際に高さ一尺ばかりの怪しい石があった。塩たきの翁は不思議に、翌日には、この石の左右に侍すように二十の小石があった。その石は。不思議な彩色がしてあり、あるものは形が僧に似ていたが、耳と目がなかった。そのとき、人が神に憑いて、『我はこれ大奈母知（おほなもち）少比古奈（すくなひこな）命なり。昔、この国を造り終えて、東海に去りしが、今、民を済（すく）う為に、また来たり』といった」と記しています。

解説：文徳実録は、平安前期の歴史書。六国史りっこくしの第五。10巻。藤原基経・菅原是善らの撰。元慶3年（879）成立。文徳天皇の践祚せんそから崩御に至る9年間の治世を、編年体・漢文で記したもの。日本文徳天皇実録。出典：デジタル大辞泉

　常陸国出雲系神社について：常陸には、この大国主命や事代主命を始め、出雲系の大神・小神を合算すると村社の数のみでも約三百以上の社数を占めています。

延喜式常陸２８社のうち出雲系を祀るものとしては、
・ 大洗磯前神社（大洗町）
・ 酒列磯前神社（那珂湊市磯崎町）
・ 大国玉村神社（真壁郡大和村）
・ 青山神社（東茨城郡常北町）
・ 鴨大神御子神主神社（西茨城郡岩瀬町）
・ 佐波波地祇（神）社（北茨城市）
・ 稲田姫神社（笠間市）
と、７社を数えます。

この中で、青山神社は「五十猛命（イソタケルノミコト）」を祭るものであり、「五十猛命」は初めて韓国に入って父・素戔嗚尊と共に８０種の山林の樹種を持ち来たり、あまねく国内に繁殖させた植林の神様です。

また佐波波地祇（神）社（ササハチノまたはササミナクミツカミ）は天之日方奇日方命（アメノヒカタシヒカタノミコト）を祭っています。
この聞き慣れない神様は事代主の第三王子で、主に海産漁業の神様として人々の崇敬を集めています。

解説：常陸国の式内社一覧（ひたちのくにのしきないしゃいちらん）は、『延喜式』第9巻・第10巻「神名帳上下」（延喜式神名帳）に記載のある神社、いわゆる「式内社」およびその論社のうち、常陸国に分類されている神社の一覧。また『延喜式』神名帳の編纂当時に存在したが同帳に記載の無い神社、いわゆる「式外社」についても付記する。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：「式内社しきないしゃ」平安中期，延喜式神名帳に記載された神社
式社・官社ともいう。神祇官が奉幣する官幣（かんぺい）社と国司が奉幣する国幣（こくへい）社の別がある。ほかの神社（式外社）と区別した待遇をうけた。全国で3132座。

二つの国譲りについて
常陸国には、多くの出雲神話がまるでこの土地の神話であるかのように言い伝えられています。その神話についてよく調べてみると、その殆どが出雲での国譲りに関係した神様が常陸国にて再生し、常陸国における蝦夷征討で活躍していることを言い伝えています。

朝廷の勢力が拡大し、（弥生人：渡来人）による国内統一が進む中で、常陸国内で繁栄していた蝦夷族（縄文人）も抵抗しきれず東北地方に追いやられることになりました。
その経緯が「星香々背男伝説」として伝えられています。

『日本書紀』巻第二 神代下 第九段本文

【書き下し文】
一あるに云いわく。「二神ふたはしらのかみ、遂ついに邪神あしきかみ及び草木石くさきのいわの類を誅つみないて、皆已すでに平むけ了おわる。其その服うべなわぬ者は、唯ただ星神ほしの香か香が背せ男おのみ。 故かれまた倭文神しとりがみ建葉槌命たけはづちのみことを遣つかわせば、則すなわち服うべないぬ。故、二神天あまに登る。倭文神、此を斯し圖と梨り俄が未みと云う。」

【現代語訳】
一説によれば「二神（タケミカヅチとフツヌシ）は、ついに邪神や草木・石の類を誅伐し、皆すでに平定した。唯一従わぬ者は、星の神・カガセオのみとなった。 そこで倭文神・タケハヅチを派遣し、服従させた。そして、二神は天に登っていかれた。倭文神、これをシトリガミと読む。」

鹿島神宮や静神社の社伝によれば、武甕槌命は香島（723年に鹿島と改名）の見目浦（みるめのうら）に降り（現在の鹿島神宮の位置）、磐座に坐した（鹿島神郡の要石とも）。天香香背男は常陸の大甕（現在の日立市大甕、鹿島神宮より北方70km）を根拠地にしており、派遣された建葉槌命は静の地（大甕から西方約20km）に陣を構えて対峙した。建葉槌命の陣は、茨城県那珂郡瓜連（うりづら）町の静神社と伝えられる。

朝廷（王権）の国内統一とは、「砂鉄の産地」を求めてなされたものであると言っても過言ではないのではないか。その為に、日向に降り立った天孫族によって、二つの国譲りがなされました。

「星香々背男伝説」大甕神社 宿魂石【おおみかじんじゃ　しゅくこんせき】
社伝によると、この宿魂石とは、この地をを治めていた甕星香々背男（みかぼしかかせお）が化身したものであるとされる。この甕星香々背男は星の神であり、別名、天津甕星（あまつみかぼし）と言う。『日本書紀』によると、国譲りの大役を終えた武甕槌命と経津主神（フツヌシ）はその後もまつろわぬ悪神を平らげていったが、最後まで屈服しなかったのが香々背男であった。最終的にこの二神に代わって服従させたのが建葉槌命（たけはづちのみこと）であり、大甕神社の祭神となっている。伝説では、香々背男の荒魂を封じ込めた石が成長するが、建葉槌命が金の沓で蹴り上げたところ、石が砕け散ったという。

この神社は初め大甕山にあったのだが、元禄２年（1689年）に徳川光圀の命によって、宿魂石の上に遷宮している（宿魂石は実際には巨石が集まってできた小高い丘である）。『日本書紀』にある由緒に基づいて遷宮したとされるが、それだけ荒ぶる神であったという認識があったものと思われる。出典：大甕神社社伝による

最初の国譲りとは、言うまでもなく「出雲の国譲り」です。

出雲地方は、主に朝鮮から青銅器文化を持ち込んだ渡来系の人々が開拓をしていました。

しかし、鉄製武器を持つ天孫族の侵入で出雲は脅かされることになります。

天孫族の武将・武甕槌（タケミカヅチ）によって突き立てられた鉄製の剣に、青銅の剣が対抗できるものではありませんでした。出雲国主（大国主命）は、知性があり冷静な判断のできる息子・事代主命に相談し、無益な血を流さず、平和的国譲りを実現しました。

断固交戦すべきである、と主張しタケミナカタは鉄製武器をもった武甕槌によって腕を折られたあげく諏訪まで追いやられ、その地で生涯を閉じることになります。

南船北馬説（室伏 志畔氏）というのがあります。交通手段に、長江下流の人が船を使い、北方騎馬民族は馬を使った。その違いで、南船系の倭人と北馬系の倭人を考えますと、日本というのは紀元前の５世紀から４世紀頃に長江下流にあった、呉や越の亡国の民が、呉越同舟して黒潮分流に乗って、韓半島や日本列島にやってきました。この人達が王権を作っていったのではないかと考えられます。古代王権は日本海側を流れたと言えます。

古田武彦氏はどこに王朝の起源を見たかというと呉や越の王権ではなく、あとから天孫降臨で、侵攻してきた朝鮮半島経由の北馬系の倭人の王朝を九州王朝としました。その前には、南船系の倭人の王権があったということになります。日本の古代史は、東アジアの民族移動史の１コマであって、その基本矛盾というのは南船系の倭人と北馬系の倭人の抗争・興亡にあると言えるかもしれません。

王朝の交替史を、出雲王朝、→九州王朝、→近畿王朝という変遷の中で考えますと、銅鐸の消滅した３世紀が、いわゆる出雲王朝に替わり、九州王朝が列島の盟主になったと言えるのではないでしょうか。

そして、もう一つの国譲りが「常陸国」だったのではないでしょうか。

鉄製武器集団（天孫族＝弥生人）は、その原料である砂鉄を求めて、常陸国までその勢力を伸ばしてきました。もともと日本の原住民であった蝦夷を追いながら、東北にやってきたのかもしれません。常陸の鹿島で良質の砂鉄を発見した天孫族は、その地に拠点を置き、そして鉄製の農機具で土地を開拓し蓄え、鉄製武器で原住民を制圧して富を得ていきます。その中心こそ「中臣氏」と考えられるのです。

常陸国はこの「中族」と出雲系民族によって開拓が進められたと考えられます。

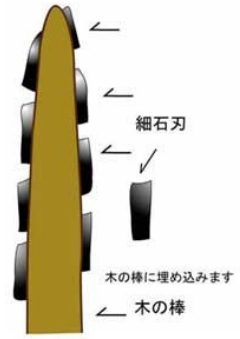
当時の常陸国は竪穴式住居に住む「土蜘蛛族」や「蝦夷」の居住の地で、出雲や九州から見ると「後進国」でした。砂鉄を産出する鹿島に東北経営の拠点をおいた天孫族は「民を救うため」と称して常陸国の開発に力を注いだのです。

常陸国の開拓者としての出雲系民族の長所とは、何だったのでしょう。

第一は舟の操縦、第二は弓馬の術であり、この技術を巧みに利用し、鉄製武器を加えて、アイヌ系他の異人族の対抗勢力を撃退していったのではないでしょうか。

常陸国海岸の東端には、アイヌ系並びに異人系（天孫族とは異人と言う意味）の先住人が大変多く各所に居住していました。『常陸風土記』に掲載されている「大櫛貝塚」には、数千年昔から巨人（俗名だいだらぼう）の住むところであり、毎日栗河（今の那珂川）に出て魚介を菜食し、その貝殻が今は数千坪の地積に広がっていると伝えています。
このことは、太古の昔、アイヌ族（縄文人）が常陸国の殆どを占め、勢力を思うがままにしていたことを物語っています。（了）

追記：考古学的に、古代に北からやって来た人達について、代表的な例をあげると、NHKの日本人はるかな旅(マンモスハンターシベリアからの旅立ち：2000年放送)では、日本で発掘された縄文人のDNAと国立遺伝学研究所DNAデータバンクとの照合の結果、発掘された(取手市中妻遺跡出土)人骨化石が、縄文人29人中17人のmtDNAが現在のシベリア先住民族ブリアート人と一致したことなどが報告されていました。
（また、2018.3.17BS-TBS 諸説あり！でも「縄文人のルーツはシベリアのマンモスハンターだった」との放送がありました。）



居住地の近くには23,000年～20,000年前の寒冷期のマリタ遺跡（1928年発掘）があり、そこで使用されていた石器（左図再現：細石刃:ハイテク替刃「マイクロブレード」やりの先の両側に付け破損したら交換が可能）が、20,000年前の北海道千歳市柏台Ⅰ遺跡で発見されたこと。　つまりマンモスなどを追って、北海道へ移動していたこと。この頃をピークに日本全体に遺跡が分布していることなどが放送されました。

取手市の細石刃については、埋蔵文化財センター第45回企画展(2019.2.15～4.21)の中で、1996年～1997年の柏原遺跡(ゆめみ野)発掘調査により、旧石器時代(BC30000～BC12000)の細石刃工房跡から４つの細石刃製作跡が発掘された事、また再現された細石刃のやり(左図)等、旧石器時代の狩猟具や出土品の説明がありました。縄文人のルーツについて、現在わかっている範囲（考古学）では、まずはじめに、北方（シベリア～サハリン）から20,000年前の北海道へマンモスやナウマンゾウなどを追ってきたこと、その後縄文時代10,000年以上の間に本州へ広がって行ったと考えられます。

したがって、日本史の概略をごく短く言いますと、日本列島へ縄文から弥生にかけて、特に弥生期（3000年前～1800年前）には、多くの渡来人がやって来ました。このため各地で争いが起こり、縄文系DNAを持つ男性の人口が３割（Y染色体Dﾀｲﾌﾟ）にまで、激減するような自体となっていました。　その後西日本を支配した集団（出雲王朝→九州王朝→近畿王朝の順）が、白村江の敗戦のあと、701年大宝律令の実施（近畿王朝の始まり、大宝建元）に伴い、旧唐書によると倭国から日本国（倭国を併合）となって、やがて自分たちの歴史書、古事記・日本書紀を作り、現在まで改元が継続していると言えます。

参考：常陸国風土記

　風土記は，和銅６（７１３）年に出された詔により，それぞれの国司が国内の風土についてまとめたものである。この詔には，

１　郡・郷の名前に好い字をつけよ
２　郡内の特産品を列挙せよ
３　土地の地味の肥沃な状況を記せ
４　山川原野の名前の由来を記せ
５　土地の伝承を記せ

とあり，全国からこの内容に従って報告書を提出させた。しかし，現存する風土記はわずかに常陸・播磨・出雲・豊後・肥前の５か国のものだけで，それも完全な形で残されているのは出雲だけである。

「常陸国風土記」の成立は，養老年間（７１７～７２４）に完成したとされている。その編者には，その当時，常陸国の国司として赴任していた藤原宇合があげられる。また，協力者としては，高橋虫麻呂の存在を考える説が有力である。この藤原宇合は，大化の改新の中心人物となった中臣鎌足の孫にあたり，父は律令体制を確立させた藤原不比等であった。だから，中央の考えた風土記作成のねらいは，宇合も充分に理解していたはずである。それに，宇合は，奈良時代の漢詩集である「懐風藻」にも詩がのるなど，当時を代表する文人であることから，「常陸国風土記」の前文にみられるような華麗な文章表現も宇合説の一つとなっている。

さらに，井上辰雄氏は，藤原鎌足（中臣鎌足）の先祖が常陸国の中臣氏から出たのではないかと考え，そのため宇合は「常陸国風土記」の編纂に情熱を燃やしたとされている。確かに，藤原氏の氏神である春日大社の筆頭祭神は，建御賀豆智命（鹿島神）で，鹿島神宮と春日大社の関係には強いものがある。しかも，鹿島郡は神の郡として，中臣氏などの司祭者の勢力下に入っていたので，大変興味深い考えだと思われる。

なお，「常陸国風土記」には仏教に関する内容が見られず，全体に神々の記述が多いのも特色の一つである。これに対し，「出雲国風土記」では寺院の記載が多く，際だって対照的だった。もちろん，編纂された年代が異なるので，その内容についても時代差があるのかもしれないが，編纂者の意向が強く現れているとも思われている。

出典：茨城県立歴史館 HP より

出典：「諏訪信仰の発生と展開」１３８頁　　古部族研究会・永井出版企画
　　「穴巣始と外来霊」

『竪穴斎屋の原始性霊』　ミシャグチとソソウ神
湖の方角から、神域の北限、有賀のこしき原附近、そして真志野、それに、神原の入口の道俣(みちまた)に　所末戸(ところまつ)社(土地をまつるという意味)に出場する
水平に訪れて来る神であり、地主神の性格をもっているようだ。

そして、この神は、「そそう神まわり給たれは、うれしみよろこひてつかへまつりぬ」と申立にあるように狂喜してむかえる神で、動物犠牲を要求する神である。
そして、御室内の小蛇や大蛇三体に向ってこの申立をするところをみると、ソソウ神は蛇体であると一応考える事が出来る。

　以上で、「萩組の座」に登場する古層な精霊、御左口神とソソウ神の性格を対比してみれば、御左口神は上空より垂直降下し、ソソウ神は諏訪湖の方より水平的に訪れ、御左口神は巣をなす恐怖すべき男性的精霊であり、ソソウ神は狂喜して迎える女性的精霊である。それは蛇体をもって現わされる。
全く性格を異にする精霊が御室の内部、萩組の座において婚姻する。

　古諏訪祭政体を支える構成人の心中深く、鉛のごとくにぶく重心として沈み、存在を左右する核は、いま厳冬の神原の一画に掘られた竪穴暗室の萩組の座で、天空にましまする父なる御左口神と、大地にましまする母なるソソウ神がまぐわひ、穀霊の胎児・大祝を孕む。

　ここで一言付け加えて置きたいことがある。
萩組の座に二四日に導入された御笹の御左口神の行方である。この神体は、三月丑日に御室を出て前宮に導入されるのであるが、この直後に、内県神使が湛(たたえ)巡りから帰って来るのである。三月末日、所末戸神事のため「奉幣に先立ち御室御出のことあり」(『画詞』)と記されているように、大祝以下「御室御出」の後、もうこの御室に帰ってくることはない。

そして、古諏訪祭体七十五ヶ度の祭祀のうち、最大の饗宴・酉の祭(大御立座神事)が、神原十間廊において催されるが、「禽獣の高もり魚類の調味美を尽くす今日堂上堂下郭外の儀式会す」(『画詞』)と描出されているように神原廊とその前の地上と、神殿郭外の三そうの道を祭場とり込んだ重儀であるが、その儀礼の中心の神体となるのは、御杖柱であり、「神長御杖を立てて又申立あり」と御杖柱に向って申立を行っている。
神体である。

中臣部（読み）なかとみべ
日本大百科全書(ニッポニカ)「中臣部」の解説

中臣氏の部曲(かきべ)。『日本書紀』天智(てんじ)天皇10年（671）三月条に「常陸(ひたち)国、中臣部若子貢(たてまつ)る」とある。『常陸国風土記(ふどき)』には、己酉(つちのととり)年（649年＝大化5）「大乙上中臣□子、大乙下中臣部兎子(うのこ)」らが天(あめ)の大神(おおかみ)の社(やしろ)（鹿島(かしま)神宮の祭神）、坂戸(さかと)社、沼尾(ぬまお)社（両社とも鹿島神宮の摂社）をあわせて香島の天の大神といい、この神の鎮

座する神郡香島郡の建郡を伝え、また746年（天平18）3月に常陸国鹿島郡の中臣部20戸が中臣鹿島連(むらじ)と改氏姓していることからも（続日本紀(しょくにほんぎ)）、常陸の中臣部は中臣氏の斎(いつ)く鹿島神宮の祭祀(さいし)に携わっていた部曲であることがわかる。なお中臣部は常陸のほか美濃(みの)、下総(しもうさ)、下野(しもつけ)、越前(えちぜん)、越中(えっちゅう)、筑前(ちくぜん)、豊前(ぶぜん)にも設定されていた。

［前川明久］

后塚古墳- 茨城 前方後方墳【きさきづかこふん】茨城県土浦市手野町字後塚 2148-1 墳長約 65m、後方部 1 辺 35～40m・高 5.5m、前方幅約 20m。周濠あり。…

宝塚古墳- 茨城 前方後方墳【たからづかこふん】茨城県茨城郡茨城町野曽東郷 886 野曽台地の先端部に立地する全長 39.3m の前方後方墳。後方部幅 19.5m・長…

勅使塚古墳（行方市） - 茨城 前方後方墳【ちょくしづかこふん】茨城県行方市沖洲墳長 64m の前方後方墳。後方部長さ 30ｍ・高さ 8m、前方部長さ 34m・高さ 5...

長堀 2 号墳- 茨城 前方後方墳【ながぼりにごうふん】茨城県石岡市柿岡 4691 全長 46ｍの前方後方墳。後方部端幅 30ｍ・高さ 3.5ｍ、前方部端幅 16ｍ・高…

姫塚古墳- 茨城 前方後方墳【ひめづかこふん】茨城県東茨城郡大洗町磯浜町全長約 29m の前方後方墳。 国指定史跡（磯浜古墳群）、2020（令和 2）年…

真崎 5 号墳- 茨城 前方後方墳【まさきごごうふん】茨城県那珂郡東海村村松全長約 40ｍの前方後方墳。

丸山古墳- 茨城 前方後方墳【まるやまこふん】茨城県石岡市柿岡 4123 全長 55m・高さ 7m の前方後方墳。1952（昭和 27）年に発掘調査が行われ、